

被災地ならではの防災教育

宮城県仙台第三高等学校 2年 宮手隆汰

私のふるさと宮城県仙台市では、東日本大震災をはじめとした自然災害が多く発生しているため防災教育に力を入れている。もちろんほかの地域でも防災教育は行われているであろうが、私の地元は被災地ということもあり、実際に被災した地域を訪問し、被災者のお話を伺うなど、より一層力を入れて防災教育が行われている。

私は、小学校入学前の4歳の頃、東日本大震災が発生し、仙台市内の自宅で被災した。幸い自宅は内陸部であったため津波の被害はなかったものの、およそ1か月の避難生活を送った。近くの駐車場ではスロープが崩れていたり、建物の窓ガラスがすべて割れていたり、衝撃的な光景を目の当たりにしたことを不明瞭ではあるが覚えている。私が小学校に入学した当時は震災後ということもあり、地震や火災、津波など幅広い防災訓練が、1年のうちに何度も行われていた。また、2月下旬から3月にかけては1週間に何度も防災に関する授業が行われていた。震災の際にどこで何が起こり、なぜ死者が多くなってしまったのかということとを考察し、命を守るためには何をするのが最適かどうかを考える授業などがあった。当時の私は、釜石での教員や学生が主体となった積極的な非難行動などについて調べ、ポスターやリーフレットのようなものにまとめることをしていた。また、災害をどのようにしたらなくすことができるのかということについても興味を持ち、小学生なりに考えていた。

私が小学生高学年のころ、防災学習の一環で、実際に津波の被害にあった石巻や女川へ行き、震災の語り部にお話を伺うという機会があった。震災の被害が色濃く残る地域へ行くことは、被災した当時の記憶が曖昧ではあるが残っており、当時のつらさや怖さを思い出してしまうのではと感じていたため、少しつらく、現地に着いた際にはやはり胸が痛んだ。しかし、被災した語り部の方に地震直後の状況や避難生活、そして今も続く復興についてのお話を伺い、被災前の街並みと、被災後、津波によって街が流され荒地となってしまった写真、復興が進む光景を実際に自分の目で見たことで、つらさだけでなく、同じようなことが起こらないよう何か行動を起こさないといけない、という少し前向きな気持ちも生まれた。また、津波の影響で鉄骨が曲がってしまった建物や崩れかけたコンクリートの柱などを間近で見た際には、写真で見た時以上の衝撃を受け鳥肌が立った。小学生高学年という年齢で改めて震災による被害を目の当たりにしたことで、自然の力の偉大さを感じただけでなく、気仙沼や釜石などほかの被災地の被害についても興味がわき、自分の目で見てみたいと思うようになった。その後、学校の授業などとは別で、個人的に被災地を訪れ、震災遺構などを見て回ることが多くなり、少しずつ人間の作ったものは自然の力ではいとも簡単に壊されてしまい、自然

災害を完全に防ぐことは難しいということを感じるようになっていった。小学生の頃はどうしたら災害をなくせるか、防げるかということを考えることが多かったが、自然の力の大きさを体感したことで、災害をなくすことは人間には難しいと感じ、今では、いかに被害を減らすことができるのかということに焦点を合わせるようになった。

高校生になった今、私は、いつどこで災害が発生するかは誰にも予想できないため、いつ災害が発生しても冷静に行動できるように地震や台風などといった知識や新しい情報を幅広く集めるよう心掛けている。当時のことを思い返すと、授業で被災地を訪れる前までは、震災の恐怖やつらさを忘れようと無意識のうちに本気で震災と向き合うことを避け、災害がなくなればいい、というもってもらいたいことだけを考えていたのかもしれないと思う。しかし、授業という形で震災と向き合う機会を持つことができたため、自らは避けていた被災地に行くことができ、またそこに興味を持つことができた。そして、興味を持ち主体的に被災地に足を運ぶことが増えたことによって、自然災害は防ぐことができないが被害を減らすことはできるということ、言葉だけでなく自分の肌で感じることができた。もし、授業を通して被災地へ足を運ぶ機会がなければ、このことに気づくこともなかっただろうと思う。

私は大学で、情報科学や情報工学について学びたいと考えている。その際には、自然災害と関連付け、過去の災害からより正確なハザードマップを作成するといった事前対策から、災害が発生した後どこで何が起きているかを瞬時に把握し、何をすべきかを的確に判断できるようにするという事後の対策まで、視野を広くして災害による被害を減らす減災を行っていきたいと考えている。